

新年のご挨拶

代表 左子真由美



みなさまあけましておめでとうございます。よい年の初めをお迎えになられたことと思います。平素は関西詩人協会にご尽力、ご協力を賜り、誠にありがとうございます。

さて、昨年は設立25周年でしたが、今年は26年目の新しい四半世紀に入ります。昨年の総会では出席者数が100名を超えるという快挙を成し遂げました。これはおそらく設立以来のことではなにかと思います。私たちはみんな詩を中心に集まったものばかりですが、いかに現代に詩が必要とされているかということをおぼろげに思わすにはいられます。人々が対話を忘れ、連帯を失いつつある今、詩を朗読し、詩を語りあう時間は何と貴重で必要な時間でしょうか。そして、詩(ことば)によってこそ明日への生きる力、希望を培うことができると思っています。

運営委員会はどのような企画が会員のみなさまに喜んでいただけるのか、たくさんの方たちに参加していただけるのか、一生懸命模索しています。今年もみなさまのご意見をお聞きしつつ、楽しく有意義な企画をしていきたいと考えております。

今年は東京オリンピックの年、関西でも詩で盛り上がりましょう。あなたにとつて新しい何かが始まる年でありませう。みなさまのご健勝とますますのご健筆を祈りつつ、年始のことばとさせていただきます。

総会の講演 以倉紘平氏の資料より

小さな町(終連) 山本沖子

晩春の午後だった。家の二階の窓から、ぼんやりと外を眺めていると、突然、三頭の鹿毛の裸馬がメイ・ストリート東から西へ疾走していった。一瞬のあいだ、はげしい足音が響きわたって、遠くへ消えていった。馬を追ってゆく人も見えなかった。三頭の馬はどこから来て、どこへ行ったのだろう。界限のお店の人はだれも通りへ出てこなかった。声高の話し声もきこえなかった。小さな町は静かな日暮れだった。

みずうみ 上村 肇

たけなす草をかき分けて 河にそった道を 幾日も幾日も私は歩いて行つた 道のつきたところの大きな湖があり 河も亦ここにつきているかと思われた この湖のほとりに私が探し求めた四人の家族が住んでいた 軒も柱も半ば朽ちた家の端居に 洪水で死んだ筈の昔の家族が 黒い羽織にくるまっている足 萎の老母(はは) 目が大きくて扁平足で 少しばかり跛行(びっこ)をひく妻 大きな白い毬を胸のあたりに抱いた目の細い娘 ジャンパーの前のチャックを半分外した九歳の息子 それらは不思議と 十年近い前の夜の夜に別れた姿と変わりなかった 私はこの湖に流れこんだ河水のように もうこの静かな世界から外部(そと)に出ようとは思わなくなつた 夜は妻の差し出す手燭の灯を船の舳において 櫂を操り独り湖心に出ては網を打つた 朝は一面の朝霧の中を 灯を消した船に濡れた網をのせ その網の上に下手な私の船歌をのせ 毎朝 葦の間の水鳥の眠りの中を帰ってきた 静かなあけくれの或る日の午後 私は漁(すなごり)の網の破れ目を拾っていた その網の上に珍しく人影がさし 顔を上げて見ると 一人は街に置いてきた二度目の妻であり 一人はその妻との中から出来た まだ幼い男の子であ

った 妻は何気なく通り過ぎて行つたが 男の子は私の前に立ちどまり「ママ パパはここにも居ないネ ママ 黒い蟹がいるよ 一匹 二匹 三匹 四匹 五匹いるよ 二匹は小さい蟹よ みんなこちらを見ているよ」と言つて走り過ぎた その夜 よふけて湖には 少しばかり風が出た だが大したこともなく 静かな朝がきて 又静かな夜がきた

「生命」 近藤孝治 以倉紘平

僕の人生 一緒に暮らす仲間たちの生涯 ここでこの場所 白い壁に囲まれた部屋で サヨナラしてしまったとしても いまを強く生きたい 太陽にはかなわない 地球にだって負けてしまふけれど いまある生命(いのち)を誇りにしたい たいせつにたいせつに一生かけて けつして立派でなくても 生きた証を遺して去りたい つか尽きるいのち 自分の運命に逆らえず 若くして果てるかも知れない この躰(からだ) それでもいい 何も望まない ただ 詩をこの世に置いて 魂を生き続けさせたい

近藤幸治(たかはる) 1979年〜1997年